

# 疑問文についての一考察

波多野 満 雄

## はじめに

英語において疑問文と言われる表現は多数ある。代表的なものは例(1a)のような yes-no 疑問文(yes-no question)、例(1b)のような wh 疑問文(wh-question)、そして例(1c)のような選択疑問文(alternative question)であるが、その他にも多くの種類がある。そもそも疑問文とは何かと言われると、厳密に定義することは難しい。疑問文なのだから、疑問・質問を表す文と定義すると、例(2a)のように「依頼」や例(2b)のように「提案」を表すものが存在する。主語と(助)動詞が倒置された文と定義すれば、例(2c)のように wh 疑問詞が主語になった場合はさておき、例(2d)のように平叙文の語順になっているものがある。疑問符が付いたものと定義しても、話し言葉では明示できないし、例(2e)のように感嘆符が付くものもある。このように疑問文には多様な側面があり、その考察にはそれだけ多くの視点が必要だと言える。本稿の目的は疑問文分析において重要な基準・視点とは何か、それらの基準や視点となる様々な要素が疑問文においてどのような役割を果たしているのか、そして、どのようなプロセスを経て多種多様な含意を作り出しているのかを考察することである。

(1) a. Do you like dancing? (BNC<sup>(1)</sup>)

(ダンスは好きですか)

b. Which do you want? (BNC)

(どちらがお望みですか)

c. Were they sad or happy? (BNC)

(彼らは悲しんでいましたか、よろこんでいましたか)

(2) a. Can you pass me the butter? (BNC)

(バターを取ってくれませんか)

b. Why not make sure? (BNC)

(確かめてみたら)

c. Who said that? (BNC)

(誰がそんなこと言ったの)

- d. Surely there is a mistake there? (BNC)  
(間違いなく、そこには誤りがあるのですね)
- e. Oh isn't that good! (BNC)  
(いやー、それってすごくない)

## 1. 疑問文の分類基準と考察の視点

疑問文という名称は一般的に「平叙文」「命令文」「感嘆文」と並び称されるものであり、その基本的な役割は聞き手に質問をすることであると言える。疑問文をその他の文と区別するための工夫には、「主語と（助）動詞の倒置」、「疑問符」、そして「イントネーション<sup>(2)</sup>」が挙げられる。形態と音声両方の特徴によって話し言葉でも書き言葉でもそれと分かるようになっているのである。

上記のような特徴によって他の文と区別される疑問文は、既述の代表的な三種類の疑問文（yes-no 疑問文、wh 疑問文、選択疑問文）の他にいくつかの種類に分類されている。このような分類がなされる基準としては、上記の三つの工夫の他に、「前提は何か」、「wh 疑問詞の有無」、そして「返答のタイプ」などが挙げられる。代表的な上記三種類の疑問文はこれらの基準によって分類されている。以上の基準は当然疑問文の考察に欠かせないものである。

上記の基準の他に、yes-no 疑問文の場合、yes/ no という極性が質問の焦点になる性質上、例 (3a-b) のように、疑問文の「肯定／否定」が大きな違いを生み出すもととなっている。

- (3) a. Do you like this? (BNC)  
(君はこれ好きですか)
- b. Don't you like this? (BNC)  
(君はこれ好きなんじゃないの)

また、疑問文分類の基準探しと同じ位重要なのが、基準の持つ意味を考察することである。既述のように疑問文を定義づけるどの特徴も全ての疑問文に当てはまるということがない。例えば、例 (4a-c) のように、yes-no 疑問文、wh 疑問文、そして選択疑問文ではそれぞれ別々のイントネーションが用いられる。このような場合、単なる分類で終わらせないためには、それぞれのイントネーションがどのような意味を持ち、疑問文の表す意味とどう関係してくるかを考察する必要がある。

- (4) a. Do you like dancing? [ 〳 ] (=1a)  
b. Which do you want? [ 〵 ] (=1b)  
c. Were they sad [ 〳 ] or happy? [ 〵 ] (=1c)

次章ではまずは各疑問文の基本的性質を押さえた上で、様々な基準・視点の持つ意味を分析しながらそれぞれの疑問文の特徴を考察してゆく。

## 2. 疑問文の種類とその特徴

疑問文は基本的に以下のように分類できる。この章ではそれぞれの疑問文の特徴と上記で述べた視点からどのようなことが分かるかを考察してゆく。

### 2.1 Yes-no 疑問文

Yes-no 疑問文の目的は基本的に文の命題内容の真偽を尋ねることであり、返答は yes/ no で行われる。形式としては例 (5a) のように主語と be 動詞、又は例 (5b) のように助動詞の倒置がなされる。

- (5) a. Is she all right? (BNC)  
(彼女は大丈夫ですか)  
b. Can you speak Japanese? (BNC)  
(あなたは日本が話せますか)

#### 2.1.1 Yes-no 疑問文の前提

前章で疑問文には前提が存在すると述べたが、yes-no 疑問文の目的が文の命題内容の真偽を問うことであるので、その前提は原則、命題の内容が真か偽であるということになる。例えば例 (5a) の場合、その前提は例 (6a)、例 (5b) の場合は例 (6b) であると言える。(cf. 今井ほか,1986)

- (6) a. She is all right or she isn't all right.  
b. You can speak Japanese or you can't speak Japanese.

しかし、上記の前提は典型的な無標の場合であって、文中の特定の語句に対照強勢がくると有標となり、前提が変わる。無標の場合、前提は文全体が表す命題内容であり、質問の焦点はその真偽におかれる。例えば例 (7a) において無標の場合、前提は「聞き手は昨日ジェニーに会ったか、または会わなかった」

ということになる。しかし、yesterday に強勢がくると強勢が置かれた語句以外の部分、つまり「聞き手が（いつか）ジェニーに会ったこと」が前提となり、強勢が置かれた部分が質問の焦点となるのである。同様に、強勢が Jenny に置かれた場合、you に置かれた場合、see に置かれた場合ではそれぞれ前提および焦点が変わり、例 (7b-e) のように話し手が問う内容が変わるのである。

(7) a. Did you see Jenny yesterday? (BNC)

b. (あなたがジェニーにあったのは昨日のことですか) : yesterday に強勢

c. (あなたが昨日会ったのはジェニーですか) : Jenny に強勢

d. (昨日ジェニーに会ったのはあなたですか) : you に強勢

e. (あなたはジェニーに昨日会ったのですか) : see に強勢

また更に、無標の場合、質問者は命題の真偽について中立、つまり真とも偽とも思っていないと考えられるが、往々にして、真偽のどちらかに気持ちの片寄りがあった上での質問をする場合もある。それを明示しているのが例 (8) - (9) である。例 (8a-b) の場合、肯定極性項目 (positive polarity item) である something や already が用いられているので、話し手は返答として肯定を表す yes を予期していることになる。そして、例 (9a-b) では否定極性項目 (negative polarity item) である ever や at all が用いられているので、話し手は返答として否定を表す no を予期していることになる<sup>(3)</sup>。

(8) a. Do you want take something on cassette? (BNC)

(カセットで何かを録りたいのではありませんか)

b. Has Martin said what I'm doing already? (BNC)

(マーティンは私が今何をやっているかを既に言ったのではありませんか)

(9) a. Do people ever spend the night on the marshes? (BNC)

(その沼地の畔で人が夜を明かすなどということが一体あるでしょうか)

b. Do you know her at all? (BNC)

(そもそもあなたは彼女のご存知なのですか)

### 2.1.2 Yes-no 疑問文のイントネーション

Yes-no 疑問文は通常上昇調のイントネーションが用いられるが、既述のように疑問文が常に上昇調のイントネーションを用いるわけではない。これから何が分かるかと言えば、イントネーションと文の型は機械的に結び付けられてい

るわけではなく、何らかの法則に則って用いられているということである<sup>(4)</sup>。根間（1996）や竹林（1996）はそれぞれのイントネーションの特徴を考察しているが、それらによると、疑問文で主に問題となる下降調と上昇調の特徴は以下の通りにまとめることができる。

下降調：下降調の特徴は「完結」「確かさ」「断定」であり、話者が伝えた情報が完結していること、話者はその情報に対して迷い・疑念が無く、確信・自信を持っていることを表す。それゆえ、ためらいや遠慮のない断定的な話し方となる。

上昇調：下降調の特徴は「未完結」「継続」「不確かさ」であり、話者が伝えた情報は未完結であること、つまりはまだ続きがあったり、言っていないこと（含み）や言えない、断定できないこと（疑念）があることを表す。したがって、情報に対して確信・自信がないことを表すことになり、断定的でない言い方となる。

Yes-no 疑問文が無標では上昇調のイントネーションになるのは、yes-no 疑問文を用いる際、命題内容に対する真偽が分かかっていないという話し手の心理状態と、上昇調の持つ「不確かさ」という特徴が一致するためであると思われる。

### 2.1.3 否定の yes-no 疑問文

これまでは yes-no 疑問文において極性の点で無標と言える肯定の疑問文について考察してきたが、次に例（10a-b）のように有標となる否定の疑問文について見てゆく。肯定文の場合、既述のように前提は文の命題内容全体であり、その真偽が焦点になっていた。極性が否定になることでこれらがどのように変わるのだろうか。

(10) a. Don't you believe me? (BNC)

（君は僕を信じてないの／信じているのではないの）

b. Don't you like this? (=3b)

（君はこれ好きじゃないの／好きなんじゃないの）

一般的に否定疑問文は肯定・否定どちらかに片寄った期待があり、現実がその期待に反する場合に用いられ、驚き・失望・苛立ち・困惑などの気持ちを表すことになると言われている。（cf. Quirk *et al*, 1985）これらの現象は肯定文に

は無いものであり、否定文になったことで生み出されたとと言える。否定という極性がどのようなプロセスを経てこれらのことを生み出したかを考える必要があるが、その前に文を否定するとはどのようなことを意味するのかを見てゆく。

例 (11a) の否定文は、肯定文である例 (11b) を否定したものであるが、前後関係によってその否定辞が否定するものが変わり、意味内容も変わりえる。一方は通常の述語動詞を否定している場合であり、他方は文全体を否定している場合である。後者の場合、例 (11b) のような発言が前提として既に存在し、それを否定していることになる。この場合例 (11c) のように言い換えが可能であり、否定が元の肯定文の外にあることが分かる。前者は「否定的内容の主張」であるのに対して、後者は「否認」と言える。意味はそれぞれ、前者が「会社はその話を否定しなかった」、後者は「会社がその話を否定したのは本当ではない／会社はその話を否定はしなかった」となる。(cf. 毛利,1980)

- (11) a. The company did not deny the story. (BNC)
- b. The company denied the story.
- c. It is not the case that the company denied the story.

以上の二種類の否定を念頭に置いて否定疑問文について考えてみる。肯定文を疑問文にした無標の肯定疑問文の場合、その前提は文全体が表す命題の内容が真か偽であるということであり、話し手はその真偽について中立であった。一方、否定疑問文は否定文を疑問文にした有標の文であり、真偽について中立ということとはあり得ず、否定辞を用いているので、まずは否定的片寄りがあると考えられる。では肯定的な片寄りはどこから生ずるのであろうか。ここで先ほどの「否認」が出てくるのである。既述のように否定文は否定辞が否定する場所によって意味が変わってくる。これまで述べた否定的片寄りを生じさせるのは述語動詞を否定している場合である。もう一方の否認の場合を考えてみると、例 (11a) の場合のように否定疑問文の前提として更に例 (11b) のような肯定文の内容が設定され、この前提となっている肯定文が肯定的な片寄りを生じさせるのである。実際の例 (12a) を用いて考察してみると、(12a) は否定平叙文 (12b) を疑問文にしたものである。この否定文は述語動詞を否定した場合、「君は僕を信じてない」という否定的内容の主張となり、それを疑問文にしているのが否定的な片寄りのある質問となる。話し手は「信じていない」という思いを強く持ち、それを言葉でも表していることになる。一方否認の場合は肯定文である例 (12d) が (12b) の前提として考えられ、従って (12b)

の意味は (12c) の「君が僕を信じているのは本当ではない」となり、この肯定文の前提が肯定的片寄りを生じさせるのである。前者の否定的片寄りが質問時の話し手の気持ちだとすると、後者の肯定的片寄りは質問する以前の気持ちだということになる。従ってこちらの解釈は、質問する前は「信じてくれている」と思っていたが、質問時には何らかの状況により、それが否認される疑いが生じてしまったということを表すことになるのである。前者は質問時の「信じていない」ことつまり、現状に対して焦点が当てられ、それが本当かを問いただしていることになり、現状への苛立ちや不満・相手への非難に繋がってゆくものに対して、後者は質問の前の気持ちに焦点が当てられ、「信じている」のが本当に否認されるのかを問いただしていることになり、自分のこれまでの予想・期待と現状のズレに対する失望・困惑に繋がってゆくのである。

- (12) a. Don't you believe me? (=10a)  
b. You don't believe me.  
c. It is not the case that you believe me.  
d. You believe me.

この両者の違いが明瞭に現れるのが、文中に極性項目が用いられた場合である。例 (13a-b) では否定極性項目が、例 (14a-b) では肯定極性項目が用いられており、前述の肯定疑問文において極性項目が用いられている場合と同様、それぞれ肯定的あるいは否定的片寄りがあると言える。否定的前提とは、述語動詞が否定された文を念頭に置いていることになり、肯定的前提とは、さらにその前の否認された肯定文を念頭に置いていると言える。従って、例 (13a-b) の場合、疾病手当をもらっていない、あるいは映画を見ていないという現状に対する驚きや非難の意味が込められているのに対し、例 (14a-b) の場合、「人を待っていると思っていたのに違うのか」あるいは「もう見ていると思ったのを見ていないのか」といった予想とのズレに対する失望や困惑の意味が込められるのである。

- (13) a. Don't you get any sick pay at all? (BNC)  
(疾病手当を全然もらってないのですか)  
b. Didn't you ever see The Invisible Man? (BNC)  
(「透明人間」を見たことがないのですか)  
(14) a. Aren't you waiting for someone? (BNC)

(君は誰かを待っているのではないのですか)

b. Had they not, after all, watched the movie already? (BNC)

(彼らは結局その映画をすでに見てしまっていたのではないのですか)

## 2.2 Wh 疑問文

Wh 疑問文の目的は文の一部に不明な要素があり、その部分のみの情報を求めることであり、返答は疑問詞の部分に入る適語で行われる。形式としては例 (15a-b) のように疑問詞を文頭に置き、「(助) 動詞 + 主語」の語順倒置が行われるが、例 (16) のように疑問詞が主語になる場合、倒置は起こらない。また、例 (17) のように疑問詞が複数用いられる場合もある。

(15) a. What's that? (BNC)

(それは何ですか)

b. Why did you open the letter? (BNC)

(何故君はその手紙を開封したのですか)

(16) What has happened? (BNC)

(何が起こったのですか)

(17) Who provides care for whom? (BNC)

(誰が誰の面倒をみるのですか)

### 2.2.1 Wh 疑問文の前提

Wh 疑問文の場合、その前提は疑問詞を除いた部分であり、疑問詞部分が焦点となった部分的質問となる。例えば例 (18a) および例 (19a) の場合、前提はそれぞれ例 (18b) および例 (19b) となる。

(18) a. What are you hiding? (BNC)

b. You are hiding something.

(19) a. Why did you open the letter? (= 15b)

b. You opened the letter for some reason.

### 2.2.2 Wh 疑問文のイントネーション

次にイントネーションについて考えてみたい。既述のように wh 疑問文のイントネーションは下降調であり、yes-no 疑問文とは正反対となっている。同じ疑問文であるのにイントネーションが異なるのは何故であろうか。既述のよう



に上昇調は、述べたことに確信・自信がないことを表し、断定的でない言い方になり、このことが yes-no 疑問文の持つ真偽不明を表す特性と一致している。一方、wh 疑問文の場合、分からない部分はあるが、それは確信・自信のなさとは違っている。Wh 疑問文の場合、分からない部分を相手に明示し、その情報を相手に直接的に要求することが目的であり、迷いの気持ち (= 不確かさ) を相手に伝えることで間接的に答えを促している yes-no 疑問文とは性質が違うのである。答えを直接的に要求するという wh 疑問文の特性が、断定的な下降調の性質と一致するのである。

### 2.3 選択疑問文

選択疑問文の目的は選択肢の中のいずれが真かを問うことであり、返答は選択肢の中のいずれかを答えることになる。形式としては、例 (20a-f) のように wh 疑問詞のないものと例 (21) のように wh 疑問詞付きのものがある。選択肢は主語 (20a)・動詞 (20b)・補語 (20c)・目的語 (20d)・修飾語句 (20e)・節 (20f) と様々である。

- (20) a. Is he or she getting worse? (BNC)  
(彼と彼女のどちらが悪くなっているのですか)
- b. Should he go or stay? (BNC)  
(彼は行くべきですか、とどまるべきですか)
- c. Is it a good thing or a bad thing? (BNC)  
(それはいいことですか、悪いことですか)
- d. Would you like coffee, or lemon tea perhaps? (BNC)  
(コーヒーがよろしいですか、それともレモンティーですか)
- e. Does amnesia go slowly or suddenly? (BNC)  
(記憶喪失はゆっくり進行しますかそれとも不意に発症しますか)
- f. Shall we go up there now or shall we wait a bit longer? (BNC)  
(もう向こうへ行きましょうか、それとももう少し待ちましょうか)
- (21) Which do you find easier multiplication or division? (BNC)  
(あなたにとって掛け算と割り算どちらが簡単ですか)

#### 2.3.1 選択疑問文の前提

前提に関しては、wh 疑問詞のない場合、yes-no 疑問文と同じく、or で結ばれた平叙文が前提になっている。例えば例 (20a) の前提は (22a) である。

Wh 疑問詞が付いている場合も焦点の部分は選択肢で埋められるので、例 (22b) のように or で結ばれた平叙文が例 (21) の前提になっていると考えてよいと思われる。

- (22) a. He is getting worse or she is getting worse.  
b. You find multiplication easier or you find division easier.

### 2.3.2 選択疑問文のイントネーション

イントネーションに関しては、wh 疑問詞のない場合、最後の選択肢の前まで上昇調であり、最後のみ下降調になる。例えば例 (23a) の場合、選択肢が3つあるが、最初の選択肢と二番目の選択肢が上昇調で発音され、最後のみ下降調となる。このイントネーションが持つ意味を一つ一つ考えてみると、一つ目は yes-no 疑問文と同じく確信が持てないという意味での上昇調である。Yes-no 疑問文は真偽の間でどちらであるのか確信が持てないのに対し、選択疑問文の場合は複数の選択肢の中でどれが正しいのか確信が持てないのである。二つ目の上昇調はこれとは違っている。この場合は上昇調のもう一つの特徴である「未完結」を表すと考えられる。選択肢がまだあり、文が終わりではないことを表しているのである。最後の下降調はこの反対である。つまり、下降調が「確信」以外に持つ特徴である「完結」によって、選択肢がこれで終わりであることを表しているのである。一方、例 (23b) のように wh 疑問詞付きの選択疑問文の場合、wh 疑問文と同形の部分が終わった所で一旦下降調になり、後は同じで最後の選択肢の前まで上昇調であり、最後のみ下降調になる。Wh 疑問文と同形の部分が下降調になるのは本来の wh 疑問文と同じであり、イントネーションの原則通りである。両者の違いは、前者が「どれなのか」と確信が持てない言い方であり、後者が「どっちだ」と明確に問いかける言い方になるということである。

- (23) a. Would you like chocolate,[ / ] vanilla,[ / ] or strawberry ice cream? [ \ ]  
(Quirk *et al.*, 1985: 823)  
(君はチョコアイスがいいのかな、バニラかな、それともイチゴかな)  
b. Which ice cream would you like,[ \ ] chocolate [ / ], vanilla [ / ], or  
strawberry? [ \ ] (Quirk *et al.*, 1985: 823)  
(君はどのアイスがいいかな、チョコかな、バニラかな、それともイチゴかな)

## 2.4 その他の疑問文

基本的な疑問文は上記の三種類であるが、この応用形と言える疑問文がいくつかある。以下それらについて考察してゆく。

### 2.4.1 付加疑問文

付加疑問文 (tag-question) の目的は相手の同意を促すことである。形式としては例 (24a-b) の様に「肯定平叙文+否定付加疑問」の形か、例 (25a-b) のように「否定平叙文+肯定付加疑問」の形になる。

(24) a. You remember that, don't you? (BNC)

(君はあのことを覚えているでしょ)

b. But it's still best to be on friendly terms with your neighbours, isn't it? (BNC)

(でも、近所の人と友達付き合いするのが依然として一番いいのではないかな)

(25) a. It's not fair, is it? (BNC)

(それは公平ではないではありませんか)

b. You didn't get back into the loft until one o'clock, did you? (BNC)

(君は一時まではロフトに戻らなかったよね)

まず初めに問題としたいのは、肯定あるいは否定の平叙文に付加疑問部を追加することで、何故相手の同意を促す意味合いが生ずるのかということである。平叙文と付加疑問文との違いは付加部の有無なので、この付加部が付加疑問文の持つ相手の同意を促す意味を生じさせていると言える。付加部である付加疑問は、原則、その主語、動詞そして時制が主文と一致している<sup>(5)</sup> 一方、肯定・否定の極性は逆であり、語順は yes-no 疑問文と同じである。従って付加部は主文と反対の極性を持った疑問文ということになる。この付加部の役割は反対の極性を並べていることから考えて、§2. 1. 2で考察した否定疑問文で見たように、「否認」を念頭に置いた疑問文であると思われる。まずは二種類の付加疑問文のうち、「肯定平叙文+否定付加疑問」の方を考察してみると、例 (26a) は例 (26b) のように肯定平叙文に否定疑問文を付けくわえたものであると考えられる。肯定平叙文である主文で意見を断定的に述べた上で、否定疑問文を追加していることになるが、これによって、§2. 1. 2で考察したのと同じ手法で最終的には例 (26c) で表した肯定的内容を話し手が予想していることを相手に伝えることになるのである。付加疑問部は「そうではないなどというこ

とがあるだろうか」といった意味合いになる。否定疑問文との違いは、否定疑問文の場合、肯定的片寄り、つまり話し手の予想・期待は非明示的であり、あくまで暗示されるだけなのに対して、付加疑問文の場合は直前に主文として断定的に明示されているということである。予想・期待が断定的に明示されている上に更に同じ趣旨の内容を述べることで念押しや確認になるのである。

- (26) a. You remember that, don't you? (=24a)  
b. You remember that. + Don't you remember that?  
c. You remember that.

次に「否定平叙文+肯定付加疑問」の場合について考えてみる。一見すると先ほどの場合と違い、付加部が肯定の極性なので否定疑問文で用いたプロセス通りには行かないように思われるが、実は同じように「否認」を用いた念押しになるのである。まずは否認についてもう一度確認すると、「否認」とはある発言なり、思いが前提として既に存在し、それを否定していることである。§2. 1. 2の否定疑問文で考察したように前提が肯定文ならば、それを否認する場合否定文が用いられるが、前提が否定文の場合は、その否認には例(27a-b)のように肯定文が用いられるのである。このように考えると、例(28a)は例(28b)のように否定平叙文に肯定疑問文を付けくわえたものであることが分かる。この肯定疑問文は前提となる例(28d)を否認した例(28c)の疑問形であり、最終的には否定的内容を相手に伝えることになる。従って、この「否定平叙文+肯定付加疑問」の形式も否定的な断定がなされた上で更に否定的な予想を述べることで、同じく念押しや確認になるのである<sup>(6)</sup>。

- (27) a. You don't believe me? (BNC)  
(君は私を信じてないのですね)  
b. Yes, I do.  
(いいえ、信じてますよ)  
(28) a. It's not fair, is it? (=25a)  
b. It's not fair. + Is it fair?  
c. It is fair.  
d. It's not fair.

イントネーションについては主文の部分は下降調となり、付加部は上昇調と

下降調の二通りがある。主文部は平叙文であり、下降調になるのは原則通りである。付加部の二通りのイントネーションについては、上昇調にすれば、既述のように疑問文の典型的なイントネーションであり、「確信が持てない」ことを相手に伝えることになる。従って、肯定・否定の片寄りを表明しながらも、相手に一応 yes-no の返答を求める意味合いが生まれる。一方、下降調の場合、平叙文に典型的なイントネーションであり、「断定的」な言い方となり、相手に返事を求めるのではなく、「念押し」の意味合いが強まるのである。

#### 2.4.2 平叙疑問文

平叙疑問文 (declarative question) の目的は相手の同意を得ることであり、形式は平叙文と同じで疑問符が用いられる。例 (29a-b) のように肯定文の場合も例 (30a-b) も否定文の場合もある。イントネーションはいずれも上昇調である。この疑問文は全体的には平叙文であり、形式的にも音声的にも最後の所で疑問文の要素が加えられたものと言える。従って、断定しながらも最後に「確信が持てない」ことを伝えることになり、それによって相手に返答を促すことになると思われる。

- (29) a. This may be the last thing I'll ever see? (BNC)  
(これがおそらく私がお目にかかれる最後のものでしょうね)
- b. And so you took the parcel? (BNC)  
(それで、あなたはその小包を受け取ったのですね)
- (30) a. You're not married yet? (BNC)  
(あなたはまだ結婚なさっていないのですね)
- b. The outlaws are not like that? (BNC)  
(その無法者たちはそんな風ではないのですね)

#### 2.4.3 感嘆疑問文

感嘆疑問文 (exclamatory question) の目的は感嘆の気持ちを述べることである。形式としては否定の yes-no 疑問文に感嘆符が付く。以上が感嘆疑問文の特徴であるが、形態的に否定の疑問文であり、意味的に肯定の意味になるわけなので、これも否定疑問文の「否認」を利用した意味と考えられる。予想もしていなかった現状に対する驚きを表している。イントネーションは下降調であり、平叙文、及び通常の感嘆文と同じく、質問ではなく、断定的な物言いとなっている。

- (31) a. Don't they, they love it! (BNC)  
(かれらはそれが大好きなんじゃない)  
b. Hasn't she grown! (Quirk *et al*, 1985: 825)  
(大きくなったんじゃない)

## 2.5 語用論的意味

疑問文は基本的に聞き手に何らかの質問をするのがその働きと言えるが、その他にも例 (32a-b) のように依頼、例 (33a-b) のように提案、例 (34a-b) のように非難等、様々な語用論的な用いられ方がされる。疑問文にこのような語用論的な意味が生じやすいのは疑問文の持つ、相手に返答を求める性質があるからと言える。相手にそれぞれ「可能性」や「意志」・「理由」等を尋ねることで、「可能ならば・・・」「意志があるのなら」「特別な理由がないのなら・・・」と間接的に相手に対して行動を促しているのである。

- (32) a. Can you wait here? (BNC)  
(ここで待っていてくれますか)  
b. Will you go now, please? (BNC)  
(もう出発してくれませんか)
- (33) a. Would you like some chocolate? (BNC)  
(チョコレートはいかがですか)  
b. Why not go to the police? (BNC)  
(警察へ行ったらどうですか)
- (34) a. Why ever did you go to the funeral? (BNC)  
(そもそもどうして葬儀なんかに行ったんだい)  
b. Why didn't I steal some? (BNC)  
(いくらか失敬しておけばよかった)

## おわりに

以上疑問文についての考察の結果をまとめると次のようになる。

- ・ 様々な種類がある疑問文の分類基準は①倒置の有無②疑問符の有無③イントネーション④前提⑤ wh 疑問詞の有無⑥返答のタイプ⑦極性などが挙げられる。
- ・ Yes-no 疑問文の目的は文の命題内容の真偽を問うことであり、返答は yes/

- noで行われる。イントネーションは上昇調が用いられるが、これは話し手の心理状態と上昇調の持つ「不確かさ」という特徴が一致するためである。
- ・否定文は「否定内容の主張」タイプと前提を「否認」するタイプがあり、これら二つの働きによって否定疑問文は、話し手の驚き・失望・苛立ち・困惑などの気持を表すことができる。
  - ・Wh疑問文の目的は文の一部の不明な要素に対する情報を求めることである。疑問詞を除いた部分が前提となり、疑問詞の部分が焦点となった部分的質問文である。イントネーションは下降調であるが、それは、yes/ no疑問文と違い、情報を直接的に要求しており、下降調の持つ「断定的」な特徴と一致しているためである。
  - ・選択疑問文の目的は明示した選択肢の中のいずれが真かを問うことであり、返答は選択肢の中のいずれかを答えることになる。イントネーションは最後の選択肢の前まで上昇調で、最後は下降調になるが、上昇調は「不確かさ」や「未完結」を表し、下降調は「完結」を表している。
  - ・付加疑問文の目的は相手の同意を促すことであり、平叙文に付加疑問が追加された構造を持つ。付加部が相手に同意を促す役割を果たしているが、これは否定疑問文同様、前提の否認を利用したものである。
  - ・平叙疑問文の目的は相手の同意を得ることであり、平叙文に疑問符が付く。この疑問符や上昇調のイントネーションが疑問文と類似の効果を生み出している。
  - ・感嘆疑問文の目的は感嘆の気持を述べることである。否定の疑問文に感嘆符が付くが、これも否定疑問文同様、前提の否認を利用し、予想もしていなかった現状に対する驚きを表している。イントネーションは下降調であり、断定的な物言いとなっている。
  - ・疑問文は「依頼」「提案」「非難」等、様々な語用論的用いられ方がされるが、これは聞き手に対して「可能性」「意志」「理由」等を尋ねることで間接的に相手に行動を促すことが可能だからである。

#### NOTE

- (1) British National Corpus より採取した例文。本稿の例文の多くがBNCからのものである。BNCとはオックスフォード大学出版局を中心として作成されている現代イギリス英語（口語、文語の両方を含む）のコーパスである。詳細についてはインターネットの以下のアドレスより入手可能。<http://info.ox.ac.uk/bnc>
- (2) 以下、英文に付いたイントネーション記号は筆者によるものであり、下記の意味

を表す。

[ ˆ ] : 上昇調

[ ˘ ] : 下降調

[ ˘ ˆ ] : 下降上昇調

- (3) 否定極性項目を用いた場合でも、常に否定的な片寄りを示すわけではない。否定的な片寄りの有無は語句以外にも前後関係などの発話時の状況によって変わりえる。下記の例は中立ないしは否定的な片寄りを表すことができ、この文だけでは判断できない。

a. Did you ever write a letter to Mrs Connon? (BNC)

(これまでにカノン夫人に手紙を書いたことがありますか)

b. Will the police raise any objection to that? (BNC)

(警察はその件に対して異議を申し出るでしょうか)

- (4) 同じ文でも異なるイントネーションで表現すると下記の例のように違った意味を聞き手に伝えることになる。例文 a と b では、下降調の a が「謝罪」の意味になり、上昇調の b は「依頼」の意味になる。また例文 c は無標の場合下降調だが、例 d のように下降上昇調で発音されると有標となり、含みのある意味となる。このことからイントネーション自体が情報伝達上大きな意味を持っていることが分かる。(cf. 竹林,1996)

a. I beg your pardon. [ ˘ ]

(申しわけありません)

b. I beg your pardon? [ ˆ ]

(もう一度言って下さい)

c. I can ski. [ ˘ ] (竹林,1996: 452)

(私はスキーが滑れます)

d. I can ski. [ ˘ ˆ ]

(スキーなら出来るが・・・)

- (5) 以下の例文は付加疑問の部分の主文の主語、動詞そして時制と一致していない。いずれも文の語用論的な含意に従って付加疑問部の句が付けられていると考えられる。

a. Now hurry up, will you? (BNC) : 命令

(さあ、急いでね)

b. Just give him a message, would you? (BNC) : 依頼

(ちょっと彼に伝言を伝えてよ)

c. I think we'd better look into this a little more closely, don't you? (BNC) : 提案



(もう少し念入りに調べた方がよくないかな、どお)

- (6) 以下の例のように、主文、付加疑問ともに肯定または否定の形式の付加疑問文も存在する。一般的に「皮肉」や「疑り」の意味を表すと言われる (cf. Quirk *et al.*, 1985) が、この場合も付加疑問部は「否認」を表し、付加疑問が肯定の場合は話し手の否定の含意を、否定の場合は肯定の含意を表す。結局、主文と反対のことを含意として暗示することになるので、話し手の「皮肉」や「疑り」の気持ちを表すことになるのである。

a. You're doing breakfast, are you? (BNC)

(君は今朝食中だということですか)

b. No one became a nun didn't she? (BNC)

(誰も尼さんにはならなかったということですか)

## REFERENCES

- Ando, Sadao. (安藤貞雄) 2005. 『現代英文法講義』 東京：開拓社.
- Imai, K. (今井邦彦) and H. Nakajima. (中島平三) 1978. 『文Ⅱ』 現代の英文法 5. 東京：研究社.
- Mori, Y. (毛利可信) 1980. 『英語の語用論』 東京：大修館書店.
- Murata, Y. (村田勇三郎) 1982. 『機能英文法』 東京：大修館書店.
- Murata, Y. (村田勇三郎) 1982. 『文 (I)』 講座学校英文法の基礎 7. 東京：研究社.
- Nema, H. (根間弘海) 1996. 『英語の発音とリズム 理論と演習の英語音声学』 東京：開拓社
- Ota, Akira. (大田朗) 1980. 『否定の意味』 東京：大修館書店.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Swan, M. 1980. *Practical English Usage*. London: Oxford University Press.
- Takebayashi, S. (竹林滋) 1996. 『英語音声学』 東京：研究社